



家づくりが育む建築への道のり | 住まいの発想で万国博参加とプロデュース提案

一級建築士事務所アトリエ4A代表 天野 彰

(第9回/全12回)

日常から設計競技にも積極的に参加

「一軒の家」を設計することで多くの家族の生活と人生に触れ、さらに多くの出会いと発見があり、それぞれの家族の本音と生きざまを学ぶ。建築士として生身の人の家をつくることは、デザインや経済優先となりにくいことから、人中心の住む人使う人に寄り添ったプランニングとなる。

こうして気が付けば小さな設計事務所を構え、家の建て主が持つ他の土地に賃貸アパートを建てたり家業の醤油味噌工場やさらには掛かり付けの医院の設計なども依頼され生涯にわたる親交が続き、今もその御子女の家づくりの手伝いまでしている。

家づくりとはまさしく生活そのもので、その視点で建物も街もさらには社会も観ることが出来る。こうしたことから日常の設計活動の中で設計競技にも積極的に挑戦提案した。

住まいづくりの発想で応募提案

設計競技は多くの建築士がチャンス勝ち取ることが可能で、競技の参加は定められた規定の中でさえあれば、自由にドラマを想定することができる。その提案こそ机上の紙ではなく、社会に向けてスケッチを描くことであり、フィージビリティな案である緊張感もある。多くのコンペに参加することはさらに社会を知ることにもなる。

設計競技の初参加は学生所員であった東京大学生田建築研究室での「日本近代文学館案」の手伝いから始まった。さらに教授から「青森市勤労青少年ホーム」の提案コンペを任せられ、建物を構成する人の流れに従って素直にプランニングするすべを学んだ。

人の動きと流れに沿うモーメントとベクトルの設計手法

人の流れとはコロナ禍で言われた“人流”とは違い、青少年や婦人、さらには市民が集う流れと向きに従った動線であり、それをモーメントとベクトルによるプラン

ニング手法と名づけた。

この手法で「酒樽の家」では間取りやカタチに翻弄されず柔軟に家族優先のプランニングが出来た。その後の複雑な生産現場や医療さらには都市計画の設計まで反映させることができた。カタチ以前のスケッチで建物を根底から構成するものとして、「建築から構築^{*1}」と称している。(スケッチと模型参照)

家づくりの機会を訪れた地ではその地域の何らかの建物やコンペにも応募し提案することにも努めた。それによって建つ家の設計にも反映された。さらに市内の病院や市庁舎、会館なども多く提案し、実際に設計のチャンスも得た。

住まいの発想で万国博設計競技に応募、入賞しプロデュースの参加

1970年の大阪万博に向けたコンペで久保田鉄工のGコラムを活用したパビリオン提案コンペでは地味に「近代農業館」の提案で参加し優秀賞を獲得。

そこで浜口隆一氏に出会え、さらに通商産業省の池口小太郎(のちの堺屋太一)氏などと中小企業共同出展の「生活産業館」(塊建築研究所:設計)に参画する荣誉を得て、各社のブースのデザイン^{*2}を任せられ、浜口隆一プロデューサーのサブとし

て生活産業館のテーマづくりと展示構成、さらに世界初の回転劇場(カルーセル)^{*3}の企画と運営プロデュースまですることとなった。

イベントとは日常の生活ドラマのエポックを表現

初めての博覧会のイメージづくりは束縛がなく自由な反面、不自由なものとなった。各地の万博会場なども視察したが、奇抜で未来志向のものばかりで失望。学生時代に見たあのチボリ公園のアットホームで浮き浮きする体感^{*4}が懐かしく思えた。

こうして“朝な夕な”のテーマが生まれ、それを一本の柱として30数余の出展各社が繋いで日常の住まいの一日、四季、そして一年、その未来へとストーリーを展開することになった。(この経緯は以下のスケッチや写真などにて紹介)

^{*1}「構築」:初期の論文「建築から構築へ」、雑誌「建築」冒頭文、1973年 人の流れとモノの流れに沿ったモーメントとベクトルのプランニングから構成・構築される。

^{*2}生活産業館の各ブースデザイン:大建工業・内田洋行・田中貴金属工業・YKK吉田工業など

^{*3}生活産業館の回転劇場(カルーセル):桜花のような花弁の一つが導入部で、100名ほどの観客を入れ回転させ、春夏秋冬、そして冬の日本の四季の情景映像を季節ごとのシアターのマルチスクリーンに映し出す。そのランニング運営まで事務所まで請けた。(プランと写真)

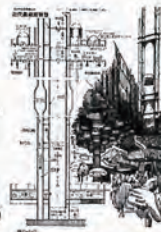
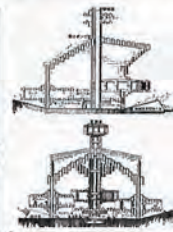
^{*4}チボリ公園での衝撃的な思い出:本誌第4回(8月号)チボリで初めて体感したテーマパークの臨場感参照。



「モーメントとベクトル」三方四方からの動線による「構築プランニング」概念図と「青森市勤労青少年ホーム計画案」(東京大学生田建築研究室 図、模型:筆者)



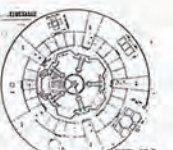
大阪万博に向けた久保田鉄工のGコラムのパビリオンコンペ「近代農業館」応募案(パース、図:筆者)



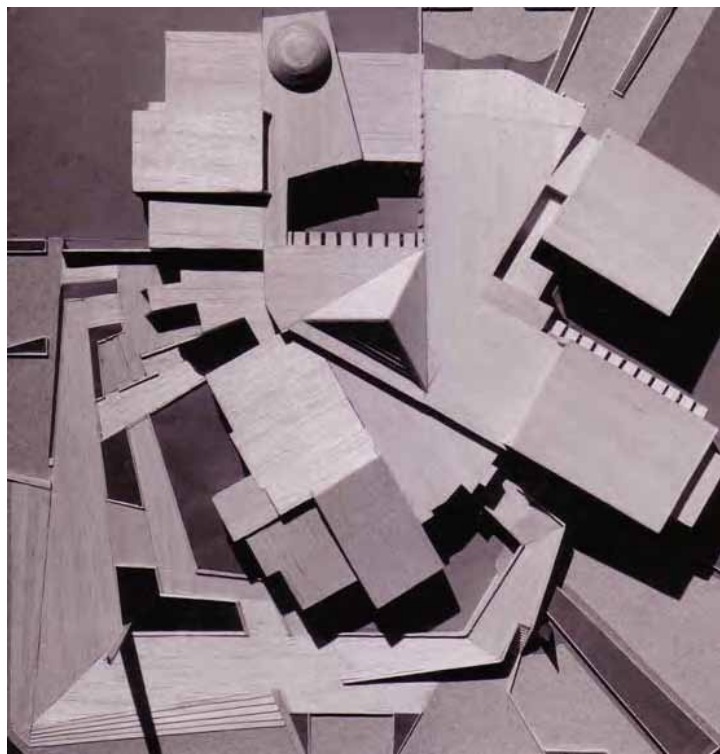
開催に向けわく大博覧会にて「生活産業館」PR展示(企画制作:筆者)と「生活産業館」情景イメージパースと開催当日会場スナップ(図:筆者)



「回転劇場カルーセル」の導入部と4つのシアターの客席が時計回りに回転するプランと秋のシアターのマルチスクリーン情景写真(図:筆者)

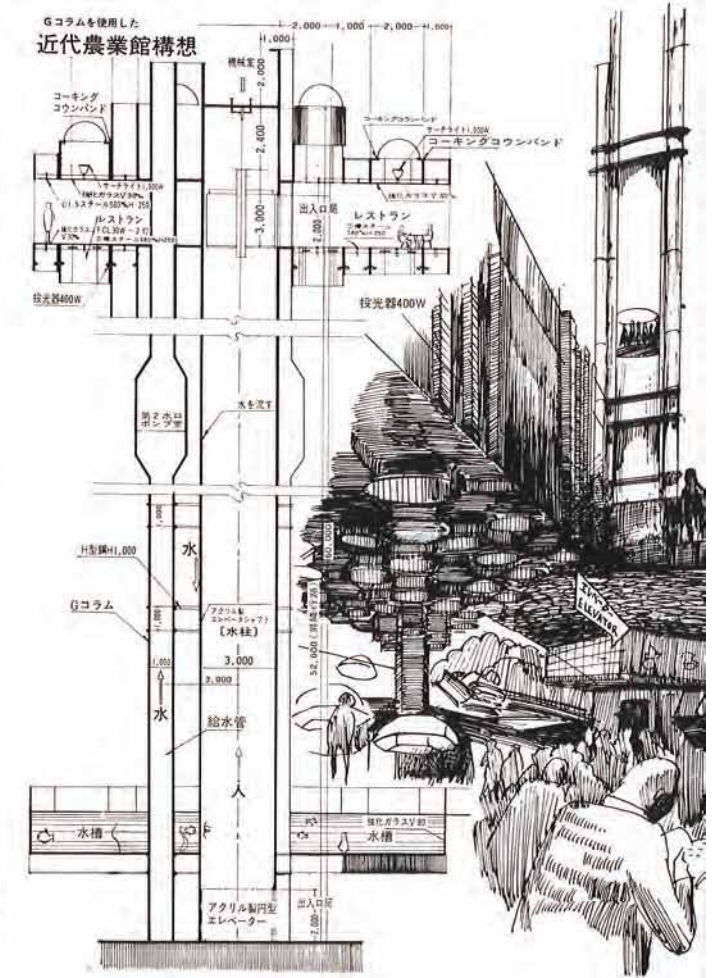
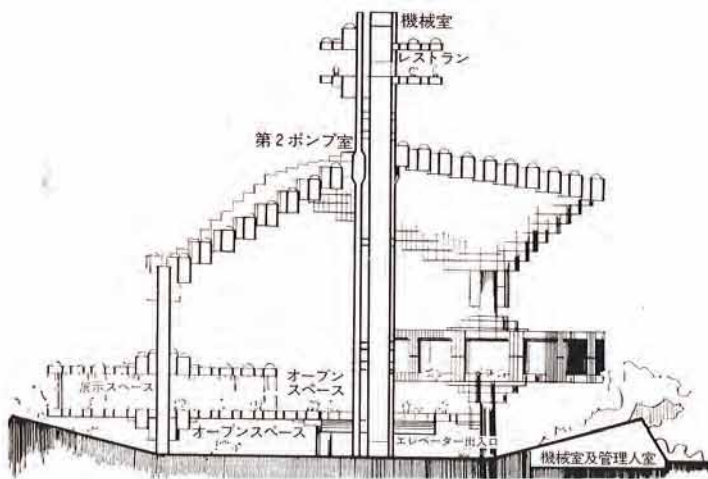


生田教授とルイス・マンフォード氏を訪ね万博に対する示唆も得られた。(ボストン宅にて生田教授撮影)



*1「建築から構築」

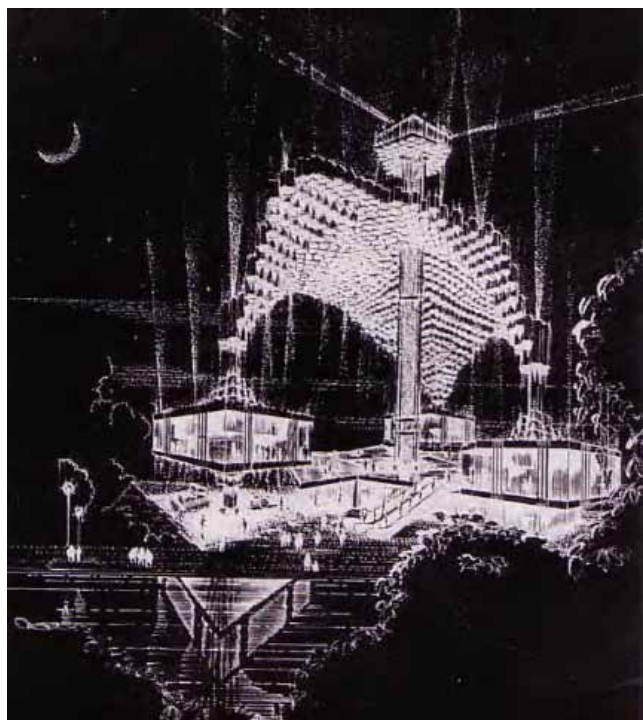
「モーメントとベクトル」三方四方からの動線による「構築プランニング」概念図と
「青森市青少年ホーム計画案」(東京大学生田勉研究室案 図、模型：筆者)



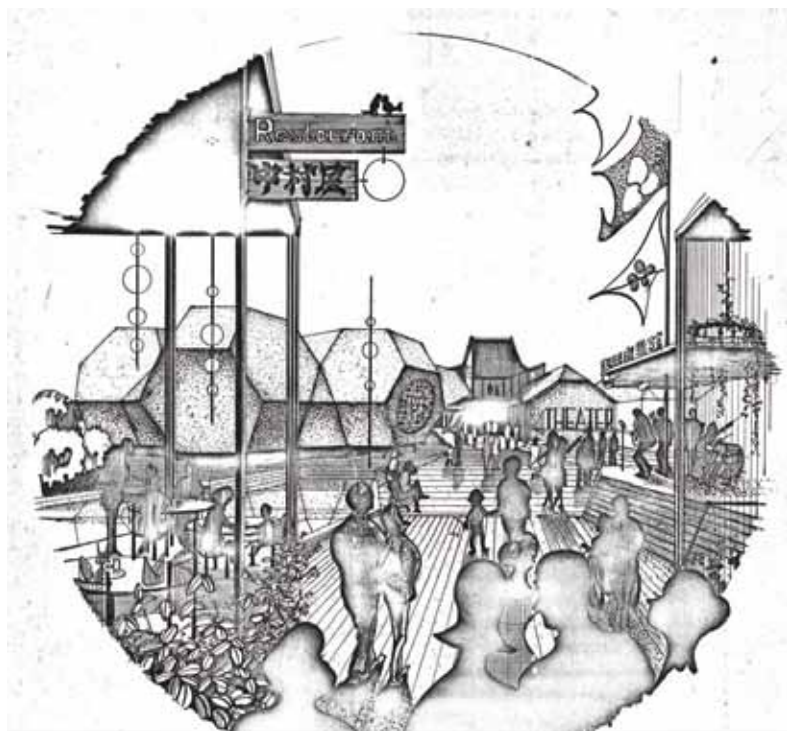
●Section

●Detail

大阪万国博に向けた久保田鉄工のGコラムのパビリオンコンペ「近代農業館」応募案 (パース、図：筆者)



*2 各社のブースのデザイン



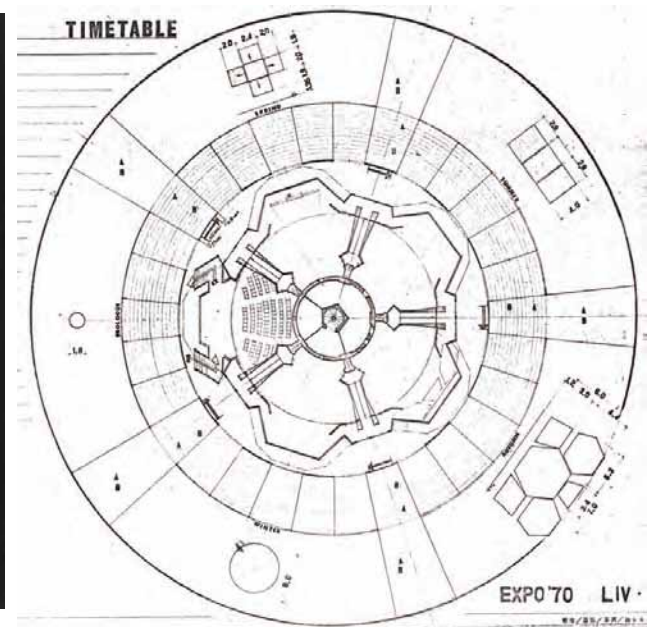
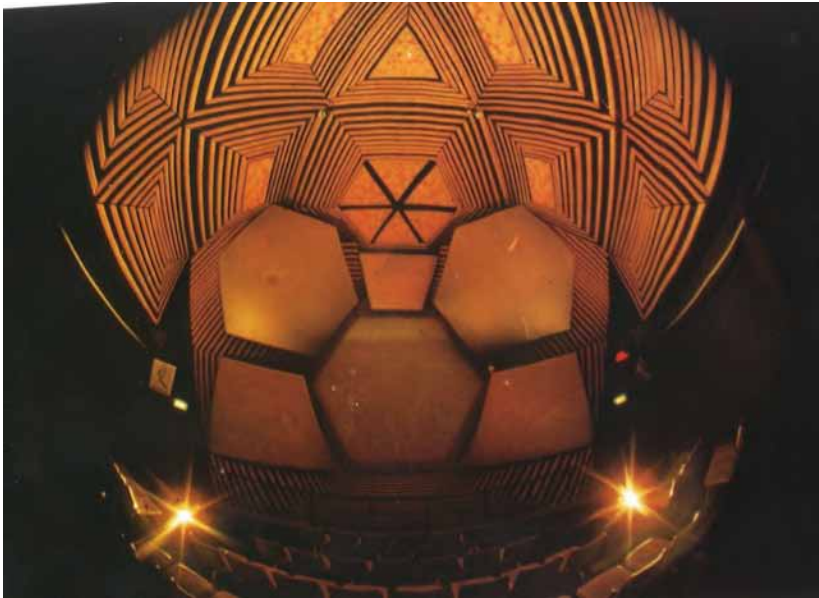
*3 生活産業館 PR 展示



開催に向けびわこ大博覧会にて「生活産業館」PR 展示（企画制作：筆者）と
「生活産業館」情景イメージパースと開催当日スナップ（図：筆者）



万博生活産業館 P R (琵琶湖博) にてデザイン筆者



＊3 生活産業館の回転劇場（カルーセル）

「回転劇場カルーセル」の導入部と4つのシアターの客席が時計回りに回転するプランと秋のシアターのマルチスクリーン情景写真（図：筆者）



生田教授とルイス・マンフォード氏宅を訪ね万博に対する示唆も得られた。
（ボストン宅にて：生田教授撮影）